# 「小河内」便り　第２０号　平成２４年１１月

特定非営利活動法人　小河内Ｏプロジェクト（理事長　渡辺眞作）

連絡所　〒731-1171 広島市安佐北区安佐町小河内４５７９－３
安佐小河内集会所
ＴＥＬ＆ＦＡＸ　０８２－８３５－０８３１
ホームページＵＲＬ　http://ogauchi.web.fc2.com/

今年も１月余り、光陰矢の如し、の感を強くします。野山が赤や黄色に染まり、北風を受けて木の葉が舞い、身軽になり冬支度をしています。年末年始を迎え、何かと気忙しくなる時期です。
インフルエンザも流向します。十二分体調管理をして少し早いですが、良い新年をお迎え下さい。

目次

小河内の現状とＯプロジェクトについて・・・・・・・・・・・Ｐ１～２
「半農半Ｘ」と言う生き方のススメ・・・・・・・・・・・・・Ｐ２
ツバル大学生、柿もぎに参加・・・・・・・・・・・・・・・・Ｐ３
９月～１２月行事、参加した行事・・・・・・・・・・・・・・Ｐ３～４
広島ユネスコ活動奨励賞受賞・・・・・・・・・・・・・・・・Ｐ４
宮城県利府町議会議員視察団一行来訪・・・・・・・・・・・Ｐ４
編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ｐ４
特集（９月以降実施したイベントや他団体に参加した写真集）・別紙

## 小河内の現状とＯプロジェクトについて

### １　小河内の現状

１１月１７日、小河内コミ協役員（各種団体で構成）とＯプロジェクト役員の合同会議を行い、今春実施したアンケートのＯプロジェクトに対する住民の要望やご意見等について話し合いました。少子高齢化、人口減少、過疎化と言う時代潮流の中でも小河内はその最前線にあり、過疎化は更に進み、保育園の閉園に続き小学校の廃校（飯室小への統合計画）も現実味を帯び、小河内の将来に一層の不安感を募らせています。僅か５００人余りの住民の２人に１人が６５歳以上の高齢者で、４人に３人が５０歳以上と言う人口構造からみて、このままでいけば、近い将来人口は急減し、一部集落の消滅も危惧されるなど、小河内の将来に不安が募ります。ＮＰＯ法人を設立１年半経過、地区活性化、再生に向け知恵を絞り、行政等のご支援をいただきながら、懸命に努力をして参りましたが、運営上の課題も山積、住民からは目に見える成果がないと、指摘されています。

### ２　住民のＯプロジェクトに対する協力のあり方について（アンケートより）

| アンケートによる住民の意見 | 議論のテーマ |
|---|---|
| ・参加者が限られている（役員だけがやっているのではないか）<br>・若者定住策になっていない<br>・活性化とは何か | ・自治会長の参加応援のあり方<br>・地域住民への呼びかけのあり方<br>・主婦層、若年層への呼びかけのあり方<br>・正会員への呼びかけ |

## ３　合同会議の意見

１　イベント等の呼びかけがなかった。あっても入りにくい。

２　先ずは正会員に協力を呼びかけるべきだ。

３　余り縛られると仕事を持っている者は会員を辞退したくなる。

４　お互いに忙しい身、目的を達成するためには多少の犠牲を伴うが協力が必要だ。

５　祭りの吹囃子は外孫を呼び戻してやっている､先ずは身内や縁者を受け入れる体制を整備すべきだ。地域の子供と交流したら。

６　高齢者は柿もぎや集会所まで出るのが困難、自宅回りの野菜の出荷位ならできる、高齢者でも手にあうことをしたら。

７　野菜を集めに回る人も必要だ。それを誰がするか、集荷の都合や時間、費用の問題もある。

８　都市に野菜を出せば確実に売れる。だが、それを誰が何時、どうやって集め、持って行くか、が問題。誰が何を出荷するか、そのためには作付段階から計画を立てなければならない。

## ４　行政や都市住民の更なる支援が必要

小河内地区の過疎問題は益々深刻さを増しています。５年、１０年先の明るい将来像が見えません。「農村の問題は都市の問題」。農村と都市が共生する社会の建設、つまり農村部と都市部の一体的な開発により小河内（農村部）の役割が見えて来ます。この問題をコーディネートするのは政治や行政の仕事。行政の更なる支援と１１８万人が住む都市住民のパワーが必要と、痛感しています。農業体験やツーリズム等に参加した都市住民は、小河内は農村の原風景や文化、そして人情が残っている、と魅力を感じています。これを後世に残すのは今に生きる私たちの任務です。

是非、ご理解、ご支援をお願い致します。

# 「半農半Ｘ」と言う生き方のススメ

「半農半Ｘ」とは、京都の塩見直紀氏が提唱している人の生き方である。

分かり易く言えば、

半農・・・米や野菜などの主だった農作物を自ら育てる半自給自足的暮らし

半Ｘ・・・自分の才能や特技など生かした仕事や志を貫くボランティア活動、又好きなことをして充実した人生を送る

を両立させる生き方である。お金や時間に振り回されない、人間らしさを回復するライフスタイルの追及である。Ｘは人それぞれにより異なる。

小河内には多くの耕作放棄地があり、野菜づくりなど親切丁寧に教えてくれる先生（百姓）がいる。「農業」をするには難しいが、半農、つまり「農」なら出来る筈だ。問題はＸであるが、これは１００人１００様。田舎で自然と共生しながら、創作活動や、野菜や花づくりなどして、心豊かな人生を送りたい、と言う方には小河内はピッタリだ。

都市にお住いの現役世代の方は、競争社会ですから、Ｘオンリー（仕事一筋）だと思う。偶には自然に触れ、田舎の空気を胸いっぱい吸い英気を養い、週末には野菜や花作りを楽しむ、こんなライフスタイルは如何ですか。

島根県はこの「半農半Ｘ」を過疎地再生の政策として採用、これに共鳴したある近畿地方の女性が飯南町に移住、看護師として病院に勤務（半Ｘ）しながら農（半農）を楽しんでいる、と言う事例がＮＨＫテルビで放映された。この女性は、看護師を天職とし地域医療に携わりながら近所の人に野菜作りなどを教わりながら農を楽しんでいる、と言う。その充実感溢れる姿が印象に残っている。

## ツバルから大学生が、農村体験ツーリズム柿もぎに参加しました

１０月２７日、農村体験ツーリズム柿もぎ体験に南洋の島国ツバルから大学生２名が、ホームスティをした菅様の紹介で参加しました。
国の国際交流で２名が広島市を訪問、日本の農村体験としてこの柿もぎ体験に参加、柿もぎや吊るし柿の作り方をして地区民と交流、記念撮影、養山八幡神社参拝をしました。
始めての日本の農村の風景や暮らし、文化に触れ、喜んでいました。
ツバルは地球温暖化などの影響で海面が上昇、島が沈む様子が伝えられ、地球温暖化の危機の象徴として、世界に報道されています。体験した模様が翌日の中国新聞に報道され、コンビニでそれを買って喜んで帰国したそうです。

中央の２人がツバル大学生、
左はホームスティ、通訳の菅さん

スタッフの指導で柿もぎをするツバル大学生

スタッフに教わりながら吊るし柿の作り方を体験

柿もぎ体験参加者、スタッフと記念撮影

## ９月～１２月行事、参加した行事

| 月日 | 行事など | 場所 |
|---|---|---|
| ９月　１６日 | 地区敬老会（地区行事） | 小学校体育館 |
| ２２日 | ハウス食と農と環境教室広島③稲刈り | 集会所 |
| ２３日 | 白島商店会③稲刈り | 集会所 |
| ３０日 | 小河内スポーツフェスタ（地区行事） | 小学校運動場 |
| １０月　７日 | 小河内農産物市 | 市野外活動センター |
| ７日 | 広島文教女子大学祭（参加） | 広島文教女子大学 |
| １３日 | 己斐上フリーマーケット（参加） | 己斐上 |

| | | |
|---|---|---|
| １３日<br>～１４日 | 安佐公民館ふれあい祭り（参加） | 安佐公民館 |
| ２７日 | 農村体験ツーリズム、柿もぎ体験 | 集会所 |
| ２８日 | 安佐商工会ふれあい祭り（参加） | コムズ安佐パーク |
| ２８日 | ひろしまフードフェスタ（参加） | 広島中央公園他 |
| １１月　３日 | 秋季大祭前夜祭「昭和劇団」奉納芝居（地区行事） | 集会所 |
| ４日 | 秋季大祭吹囃子行事（地区行事） | 養山八幡神社 |
| １７日 | ハウス食と農と環境教室広島④収穫祭 | 集会所 |
| ２３日 | 地球温暖化ストップフェア（参加） | 県立産業会館西展示場 |
| ２４日 | 農村体験ツーリズム、牛頭山登山 | 牛頭山 |
| ２４日 | 農村体験ツーリズム、ゆずもぎ、加工体験、 | 集会所 |
| １２月　１日 | 農村体験ツーリズム、漬物講習会 | 集会所 |
| ８日 | 農村体験ツーリズム、竹林整備（孟宗竹切り出し体験） | 集会所 |
| ９日 | 安佐北元気フェスタ（参加） | 安佐北区民文化センター |

## 広島ユネスコ活動奨励賞受賞決定（広島ユネスコ協会）

地域遺産や文化、環境保全等に取り組んでいる団体を顕彰する広島ユネスコ活動奨励賞に当法人の活動が評価され、このほど受賞決定の通知がありました。
当地区は高齢化が進み、過疎地ながら地域が一体となって、環境保全活動(炭焼き事業、弥太郎君)や吹囃子行事や田舎芝居の昭和劇団、伝承話を紙芝居に創作など地域遺産、文化の啓発、保護、継承の地道な活動が評価されたようです。
表彰式は来年１月１９日、広島市文化会館（旧厚生年金会館）で行われます。

## 宮城県利府町議会議員団一行が研修、視察に来所

１１月２７日、宮城県利府町議会議員視察団の渡辺議長他４名が当法人の活動状況を視察、研修に来所されました。利府町は仙台市に隣接する人口３５０００人余の大きな町ですが、山間の集落では高齢化が進み、大規模団地の小学校児童数も１０００人いたものが現在３００人になるなど、高齢化と過疎化が課題である、と報告され、日本どこもこれが課題になっていることを知りました。

## 編集後記

農業体験や農村体験ツーリズムに参加した都市住民から、生の自然に触れ感動した、本当の野菜の味がする、小河内の人は親切だ、など小河内の印象を語っています。以前、我が家に宅配便を届けに来た人が、道に落ちている真っ赤なもみじの葉っぱを掃いているのを見て、もったいない、と言ったことがありました。小河内には足元にまちづくりの素材やヒントがあることを教えてくれました。
この秋も農村体験ツーリズムに多くの都市住民が初めて小河内を訪れました。高齢化と過疎問題が深刻な小河内にとって、都市住民の訪問は何よりの励ましになります。ありがたいことです。地区民にとっても知らない人と話ができ、親しくなるのは大きな財産になります。感謝です。（Ｓ）